フォーラム「私たちが生きる意味―相模原殺傷事件から考える」詳報 (上)

「寝たきりでも笑うことできる」

事件 つらく、悲しい／寄り添うことで安心

相模原市の知的障害者施設・津久井やまゆり園で、入所者ら46人が殺傷された事件＝㊟＝を踏まえたフォーラム「私たちが生きる意味―相模原殺傷事件から考える」は、宮崎市民プラザでこのほど開かれた。同市のNPO法人・障害者自立応援センターYAH!DO（やっど）みやざき（岩切文代理事長）主催。神奈川新聞デジタル編集部兼報道部の成田洋樹記者が事件報告を行い、東京都・国際医療福祉大大学院の大熊由紀子教授が基調講演。県内の障害者や支援者ら5人が事件への思いや共生社会実現に向けた提言を行った。

（徳留亜弥）

パネルディスカッション

中川　事件への思いは。

岩切　手足の先から筋力が低下する遠位型ミオパチーという難病で、ベッドに寝たら手足も動かせない。同じように、抵抗したり逃げたりできない人が殺された事件はつらく、怖く、苦しく、悲しい。

病院や療護施設で22年間に来てもらう生活を始めて12年。自分で自分のことを決める生活はすごく幸せだ。

日高　うつ病と線維筋痛症がある。精神障害は誰でもなり得るが、偏見を持たれがちだ。障害者差別解消法ができ、周囲に配慮を求めていい時代になった。しかし事件後、精神障害の人は危ないという誤った考えが広まった。

同時に、植松聖被告＝殺人罪などで起訴＝の「障害者はいなくなればいい」という言葉に、悲しい気持ちで過ごしている人も周りに多かった。

井島　抵抗できずに亡くなった19人を思うと、怒りしかない。36歳のわが子には重症心身障害がある。寝たきりだが、笑うことができる。その笑顔に救われる。あの事件で、わが子が一番先に命を奪われると感じた。

子どもの通う施設の職員からは、笑顔が疲れを癒やしてくれると言われる。兄弟も人の痛みの分かる優しい人に育った。障害が重くても、絶対に誰かの役に立っている。

吉村　看護師として20年間、精神科に勤めた。認知症の人の病院での暮らしに疑問を持ち、認知症の人と家族の会の立ち上げに取り組んだ。自宅で認知症の人を預かった経験から、居心地のいい場所をつくり寄り添うことが、認知症の人を安心させると分かった。事件では、なぜ人の命に価値をつけて命を奪ったのかとショックを受けた。

大口　東京で生まれ、結婚し宮城県に住んだ。東日本大震災直後、息子と宮崎に移住。短歌に携わりながら、9歳になった息子と夫と暮らしている。事件はショックだったが、遠い所で起きた特別な事件と考えていた。

被告の「障害者は不幸しかつくることしかできない」という決めつけに驚く。経済性だけでみたら、私も立派な人間ではない。震災後、「被災者」というフィルターを通して見られているという違和感があった。でも私も、障害者という枠の中に個人を入れて見ていたのではと反省した。

中川　助言者として意見を。

成田　被告の考え方に「障害者は誰かの役に立っている」と反論することは大切。だが、誰かの役に立っていなくても、一人一人が尊い存在だというところを出発点にして考えた方がいい。どんな人も自分らしく生きる権利があると認め合うことが大切だ。

大熊　日本のように重度障害や認知症を理由に、人里離れた施設や精神科病院へというのは、世界の常識から外れている。しかし福祉国家といわれるスウェーデンでも、昔は認知症患者の身体拘束があった。過去を誤りと分かって変えた国が、世界にはあると知ってほしい。＝㊦は16日付＝

相模原殺傷事件への思いを語る県内の障害者や支援者ら＝宮崎市民プラザ（戎井聖貴撮影）

相模原殺傷事件　2016年7月26日、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刃物で刺され死亡、職員2人を含む27人が負傷。元職員の植松聖被告が殺人罪などで起訴された。

登壇者

自立生活を送る障害者
岩切　文代さん（YAH!DOみやざき理事長）

精神障害のある
日高　信明さん（宮崎こころリンク代表）

障害者の母親
井島　尚子さん（県重症心身障害児者を守る会会員）

認知症高齢者を支援する
吉村　照代さん（NPO法人ゆめ家族代表）

障害のない人の立場
大口　玲子さん（歌人）

助言者　成田　洋樹さん（神奈川新聞記者）
大熊由紀子さん（東京都・国際医療福祉大大学院教授）

進行　中川　美香（宮崎日日新聞・生活文化部長）

事件報告

基調講演

神奈川新聞記者　成田　洋樹さん

なりた・ひろき　1975（昭和50）年、神奈川県生まれ。2000年に神奈川新聞入社。16年から現職。津久井やまゆり園の事件や教育問題に取り組む。

不寛容な時代象徴

相模原殺傷事件の取材を続ける、神奈川新聞の成田洋樹記者による事件報告の要旨は次の通り。

事件は、他者を簡単にバッシングする不寛容な今の時代を象徴している。それぞれが弱い部分や生きづらさを抱えながら、お互いを認め合う社会が築き上げられるかが問われている。

植松聖被告＝殺人罪などで起訴＝の手紙には「共生社会とは一人一人が自立し支え合うことだと考えられますが、今は寄生社会と呼ぶ方が的確と思います」とあった。そもそも、人は依存し合う存在だ。しかし多くの人は、自分の能力だけで生きることが自立だという考えを無意識に受け入れていないか。

障害者や在宅で介助している家族には依存先が少ない。一人一人に十分な依存先が用意されて初めて、自らしく生きられる。共生社会はこの先にある。

事件後、神奈川県知事は、津久井やまゆり園（県立）の全面建て替えを決めた。しかし、今年1月に県が開いた公聴会で反対意見が相次ぎ、県は仕切り直しをした。当事者の意向を丁寧に確認する手順と組織を確立したことは、大きな前進だ。

現在地や横浜市に小規模施設を造る話になっているが、中には大規模施設を望む家族もいる。津久井やまゆり園では、民間施設で対応が難しい重度の知的障害者を受け入れていた。多くの当事者が地域から排除され、交通アクセスの悪い山あいの大規模施設「津久井やまゆり園」を選ばざるを得なかったのだ。今後、当事者が大規模施設以外の生活を体験できる場が必要だ。

事件では遺族の希望により、犠牲者が匿名となった。被害者の匿名は「名前を出せない人」が社会にいることを認め、亡くなった人をおとしめかねない。重度の障害があっても、地域で生きていくことが大切だ。地域で暮らす私たちが、障害者や引きこもりの若者など、肩身の狭い思いをする人に気付かなければ、差別に加担することになる。